

## 山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』翻刻（四）

杉山友美  
西澤美仁  
牧野和夫

前号（実践女子大学文芸資料研究所『年報』二十号「山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』翻刻（三）」に引き続き、本稿では第四冊を翻刻する。

【凡例】（各冊において朱墨の割合に差があるため、朱墨表記に関する凡例は各冊ごとに定めることになる。）

一、本翻刻は実践女子大学図書館山岸文庫に所蔵される『古今和歌集聞書』（五冊）を底本として翻刻を進める。  
一、本稿では第四冊を翻刻する。

一、原本の行取り、改丁に順じ、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付して（「」1オ）の如く示す。

一、漢字は原則として通行の字体を用いる。異体字（ㄗ）、（ㄛ）はそれぞれ（コト）、（シテ）と示す。

一、問答の頭左右に朱で合点が記されているが、（〃）と示す。ただし、20オ7行目の合点は墨書。

一、頭書並びに合点は朱で記されている。ただし、10オ6行目の上欄にある「序」、7オ6〜7行間・7ウ8行目・11オ7行目・14オ4行目・同ウ3行目・16オ1行目・18ウ10行目・23オ10行目の上欄にある「○」は墨書。

一、書名符及び朱引等は煩雑を避けるため今回は省く。

一、傍注は本文より活字ポイントを下げて原本に順じ、傍記する。傍注はほとんどが墨書であるが、ただし、24オ5行目「ありし」の「り」の傍書「る」、25オ2行目「さけなん」の「な」の傍書「る」、26オ6行目「里」の傍諸「男」は朱書。

一、虫損等による欠字分は（□）を以って示す。

一、一つまた複数の「ヒ」を以って記されている見せ消ちは本文左傍に（ヒ）と示す。

共五  
古今和歌集第四

圓藏坊

元超藏

古今和歌集卷第十四

○恋歌四

花かつみ

ふるの古道

みまれみすまれ

二葉

はつる

「前表紙  
前見返し

みちのく哥に花かつみとはまこも也此哥は業平の娘を思<sub>ニ</sub>かけて読<sub>テ</sub>  
遣<sub>ス</sub>在原の基平の哥也是は行平か二男也 あひみすは<sub>〇</sub>の哥は助内侍  
を恋て躬恒か哥也 いそのかみの哥にふるの古道とは大和<sub>ニハ</sub>西東  
中<sub>ノ</sub>道<sub>三ツ</sub>有今のふるは中路也此哥延喜三年内裏<sub>ノ</sub>哥合<sub>ニ</sub>読<sub>ル</sub>也  
君といへはの哥にみまれみすまれとは見<sub>ル</sub>時<sub>も</sub>みぬ時<sub>も</sub>思ふと云心也  
此哥は伊勢を恋て読<sub>ル</sub>也 夢にたにの哥にみゆとはみえしとは  
君か夢にわかみゆるとたにみえはと云也我面影にはつる身  
なれはとは我面影たにもた、ぬ身なれはと云心也はつる  
とは面影にた、ぬ義也此哥は業平を恨みて読<sub>ル</sub>哥也いしまゆく  
の哥にかくこそはあれあかすも有かなとはあかねはかくて  
るそと読給也此哥は業平内裏へ参たりけるを二条の后つく  
くとのそかせ給ければ業平かたはらいたけに思ひて有ければ  
二条后の読<sub>テ</sub>業平<sub>ノ</sub>許へ忍<sub>ニ</sub>遣<sub>テ</sub>哥也 い勢のあまの哥は七条  
中宮を深<sub>ク</sub>思<sub>ヒ</sub>給ければ読給宇多院の御哥也哥無義 春霞  
の哥は寛平七年六月十三日内裏<sub>ノ</sub>哥合<sub>ノ</sub>哥也哥無義 心をその哥は  
同時の御哥合<sub>ニ</sub>読<sub>ル</sub>哥也無義 かれはてむの哥は助内侍を恋て  
読<sub>ル</sub>哥也哥無義 あすか川の哥は天安四年八月十五日文德天皇春  
日<sub>ニ</sub>行幸<sub>ノ</sub>時大藏卿橘光頼か御供なるをみて八橋の玄清

「1才

小菟

宇治橋姫

いさよひ

三葉

月夜よし  
夜よし

こてふ

こ紫  
もとゆひ

法橋<sup>カ</sup>娘の讀て遣<sup>ス</sup>哥也無義 寛平后宮の哥合<sup>ト</sup>寛平二一

年正月十六日内裏<sup>ノ</sup>哥合<sup>ノ</sup>哥也哥<sup>ニ</sup>無義 此哥は惟貞親王の

御哥也 さむしろの哥にさむしろと云に二義有一<sup>ニハ</sup>小菟

書り二<sup>ニハ</sup>閑菟<sup>ハナカシモ</sup>書り 古選云霜弘<sup>ヒ</sup>露打弘<sup>ヒ</sup>閑菟<sup>ハナカシモ</sup>独寝夜<sup>ヨシ</sup>

暁波長紫毛<sup>ハナカシモ</sup>此哥は田上里樹<sup>ハナカシモ</sup>よめる哥也今此閑菟の哥のさむし

ろとはさむしきむしろの義也宇治の橋姫<sup>ト</sup>云事続日本記云檀

根<sup>コト</sup>尊御娘津国<sup>ノ</sup>濱<sup>ニ</sup>出て遊<sup>ヒ</sup>給ひければ住吉明神行てあひて

互に契給ひて宇治へ行かむとの給けるか行給はずして思ひ

やりて読給哥也此橋姫は或<sup>ル</sup>処の河にて向<sup>ヒ</sup>男の有けるあ

はんとし給ひけるに河を渡る事かなはずして逢事なかりけ

れは誓て橋を守る神と成給へり さて宇治の橋を守て

橋姫をいはれ給ふ君やこむ我やゆかんの哥いさよひとは立や

すらふ義也宇治殿風月集に云白雲移<sup>レ</sup>花<sup>ヲ</sup>二月ノ夕<sup>ヘ</sup>黒水

似<sup>リ</sup>夜<sup>ニ</sup>三秋<sup>ノ</sup>朝<sup>ヲ</sup>待<sup>テ</sup>友<sup>ヲ</sup>徘徊<sup>呼<sup>フ</sup>君遊興<sup>イヘリ</sup></sup>此哥染殿内侍

を恋て景式大君の哥也 いまこむの哥は清水別当法橋覺俊

か娘の許へかよひけるに今宵はこむといひてこさりける夜よめる

哥也哥無義 月夜よしの哥意は月夜よし夜能といひやり

たらはことよふに似りされはとてまたすはあらずと云也

こてふはこと云に似<sup>リ</sup>云意也此哥は助内侍<sup>ニ</sup>忍ひてあひ

給ひし時よみ給ふ常康親王の御哥也 君こすはの哥にこ紫

わかもといひと云事は大国<sup>ノ</sup>習也大国<sup>ニハ</sup>女<sup>ハ</sup>紫<sup>ノ</sup>糸<sup>ニテ</sup>髪をあくる也

こ紫とはこき紫也されは君こすはむらさきのもとゆひに霜は

おくともねやへ入しと読り此哥は忠仁公御娘染殿<sup>ニ</sup>後のいもつ

1ウ

2オ

と御座けるを遠経右大臣たのめて御座<sup>け</sup>ざりけるに彼姫  
きみ終夜待給ひて読給哥也或説<sup>ニハ</sup>聖武天皇御座さり

「 2ウ

ける時光明皇后読給といへり此義は不然彼光明皇后御

哥は万葉云 君不来波寝屋毛不入 紫之本結之上尔  
霜波置登毛と有されは此哥を思<sup>ヒ</sup>たかへて光明皇后の

もとあらの小萩

露をもみ

ごと

御哥といへり みやき野の哥にもとあらのこはきとはもと  
あらし小萩也みやき野は陸奥国<sup>ニ</sup>有露をもみとて露

をもしと云義也風をまつこと、は露の風を待<sup>テ</sup>ごとくに君を

待我身もあたなりと読り御政伝云竹林ノ七賢者得<sup>テ</sup>

帝道<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>仕<sup>セ</sup>世<sup>ニ</sup>冷泉三聖 得<sup>レ</sup>徳<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>衆<sup>ニ</sup>是<sup>ハ</sup>危<sup>シ</sup>世<sup>ヲ</sup>恐<sup>ル</sup>、コト国<sup>ヲ</sup>

如<sup>リ</sup>易<sup>シ</sup>消<sup>ス</sup>秋風<sup>ニ</sup>草露<sup>ヲ</sup> 此竹林ノ七賢者冷泉ノ三人聖賢不<sup>シ</sup>仕<sup>レ</sup>君<sup>ニ</sup>

閉籠たりしを云也晋七賢者 嵇康<sup>ケイカウ</sup> 字<sup>ヲ</sup>叔夜<sup>シヤ</sup> 阮<sup>ケン</sup> (既) 籍字<sup>セキ</sup> 飼

宗阮 (既) 感字<sup>カン</sup> 仲容<sup>チュウヨウ</sup> 向秀<sup>キョウシュウ</sup> 字<sup>ヲ</sup>季真<sup>キケン</sup> 劉<sup>リウ</sup> 字<sup>ヲ</sup>伯倫<sup>ハクレン</sup> 王戎<sup>ワウジウ</sup> 濟

仲冷泉三聖<sup>ト</sup>は魏徵<sup>テイ</sup> 虞世南<sup>ヨ</sup> 王娃<sup>ワ</sup> 是也今風をまつことくは

此深意をよめり此哥は聖武天皇夕へく<sup>ニ</sup>に御座<sup>シ</sup>ける時光明后

のよみて遣<sup>ス</sup>御哥也あな恋しの哥にいまもみてしるとはいまも

みはやと云心也 かきほとは垣<sup>ノ</sup>面也 やまとなてしことは

大和国より来<sup>ル</sup>をさなきものなれはとこ夏になそらへて

やまとなてしこと読也 ふるき哥にやまとなてしことは

をさなきものを讀り此哥は平元親<sup>カミ</sup> 子山城<sup>ノ</sup> 光明山<sup>ニ</sup> 春菊

とていとみめよき児の有ける親やまとに有ければ大和より

常、のほりけり或時大和より光明山へ上るを天台座主幽仙

律師道にて行合<sup>テ</sup>みそめて恋<sup>テ</sup>遣<sup>ス</sup>哥也 つの国の哥に

かきは  
大和なてしこ

「 3オ

山城のとは

山城のとはつねに云事也其をとほになぞらへて読<sub>ル</sub>也つの国  
のなにはとは難波をなぞらへて読<sub>ル</sub>也此哥は重明親王賀茂に

色嶋

て哥合し給ひし時助内侍を讀<sub>ル</sub>哥也是は延喜二年三月十八日の  
事也 しきしまとは日本、惣名也日本を色嶋と云事はいさなき  
いさなみの尊の日本国をつくりし事は陰陽赤白の二<sub>ヨリ</sub>造り出し  
給へり嶋なるか故に色嶋と書てしきしまと云也されは彼

誕生、処淡路国なる嶋いろをへたて、赤白<sub>ナリ</sub>仍彼所を二<sub>ニ</sub>  
色の浦浦<sub>ト</sub>云是也又家隆にはしきしまとは四城嶋と書り

唐衣

是は東夷南蛮西戎北狄此四人の夷<sub>ス</sub>四方に城をかまへて  
君を守り奉<sub>ル</sub>故に四城嶋<sub>ト</sub>いへり から衣<sub>ト</sub>唐衣也臣下以  
下には是を讀へからす此哥は延喜七宮を恋奉て讀<sub>ル</sub>也

藤なみ

恋しとはの哥は中勢を恋て讀<sub>ル</sub>哥也 三吉野の哥におほ  
かはのへとはよしの河也藤なみとは藤の花也なみとは人なみにおもは、と  
云心也なをさりの義也此哥は近江の采女<sub>ニ</sub>よみてたひたる天智天  
皇、御哥也 かくこひむの哥は小町かみめのよき由聞食て御覽

して後恋しくおほしければ読て送給惟高親王の御哥也天の原  
の哥はと、ろかすとはうこかすを云万葉云 <sub>マスラツカキケタテ</sub>

ふみとろ  
かし

揺動<sub>ト</sub>山毛葉若賀<sub>マ</sub>下<sub>ハ</sub>尔夫鹿鳴<sub>カ</sub>也 此哥は陽成院の御哥

合に元慶三年四月八日に読<sub>ル</sub>紀乳母の哥也是陽成院御めのと

ひきの、

紀助範か娘也 あつさ弓ひきの、つゝらとは疋野と書り  
備後国に有わか思ふ人にこととしけ、むとはことしけくあ

はんと云事也此哥は天智天皇のあそはして近江の采女に  
たふ哥也 夏ひきの哥は彼御返事に采女読<sub>ル</sub>哥也夏ひき

「 3 ウ

「 4 才

「 4 ウ

夏引手ひきの糸 のてひきと云は我手にてひく糸也其後御門大伴、懐人、カ娘

をおほしめして采女を捨て給ひければ御門をうらみ奉て

猿澤の池に身をなけて死ぬその髪みな玉藻と成ぬ御門

かく成ぬと聞食て行<sup>キ</sup>御覽すれは常になれ給ひしねく

たれかみ池、玉藻と成けるを御覽して鳥羽玉のその黒髪

はさる沢の池の玉藻と成にける哉其後御門此事を歎給

ひて引籠らせ給けりと云 里人の哥に里人と云は内

裏の外の人をみな里人と云されは王、暫、内裏を御出御座<sup>ス</sup>

所をはみな里内裏<sup>ト</sup>云也ことは夏野のしけくとはあふことは夏

野のしき様にあれともつゐに別る、と云り此哥は仁和第

四王子貞行御子、小町かあねの里に有しを常に思食<sup>テ</sup>よみ

給御哥也 業平の家成ける女とは業平の妹初草の女也かす

く<sup>レ</sup>の哥は伊勢物語のことし ある女とは二条の后也伊勢物

語の如<sup>シ</sup> すまの浦の哥に風をいたみとは男の心をいたみて

思はぬ方に行と云心也此哥は清和天皇、姫宮選子内親王忍

ひて業平にあひ給ひけるか基源康、親王、みやす所に成

て津国すまへ下給ける時業平の読<sup>ヒ</sup>選子内親王の許へ遣<sup>ス</sup>

哥也 玉かつらとはかつらの名也玉はほむる義也此哥の意は玉かつら

木にはひつく様に男あまたある人なれば思へとえたのます

と云心也 是は光孝天皇かよひ給ひけるを聞て橘、長盛か

読<sup>ル</sup>哥也 たか里にの哥よかれとは夜別と書り 此哥の心は

いかなる男に別てきてこゝにねたるこゑはするそと云り里とは

男を云也 男女人のやとり成か故に里<sup>ト</sup>云也上如<sup>レ</sup>云此哥は重明親

里人  
里内裏

玉かつら

よかれ  
男を里<sup>ト</sup>  
云事

「 5 才

「 5 ウ

月草  
うつし心

五葉

○

べら  
そをたに

有しより

よとみなん

王に時々あひ奉りしかたえて後彼親王ニまいりたりける時親  
王のよみ給哥女ナハ紫野の内侍也此内侍は朝行中納言の娘也後には  
定文か妻となるいて人はとは普通のいてと云詞也つきくさ

はつゆ草なりうつし心はいろことにしてとは物にうつろふ心は色  
ことになりてと云也ことのみそよきとは詞斗リよきと云心也此哥

は藤原コトナラ言直うらみて小町カ姉備前か説ル也偽の哥は序ニ云如シ  
但シ此哥は家の略注ニハ融大臣の娘を恋て大津ノ家守かよめる

といへりいつはりとおもふ物からの哥は延喜三年七月七日内裏の哥合  
の時延喜御門御哥也 秋風の哥は元慶六年六月十八日宇治河

鬮ニ陽成院御幸なりし時御共にてつかふまつり給昭宣公の  
御哥也 寛平二年正月十六日哥合也哥に無義 うつせみの世の人

ことのははかなき人の詞也忘れぬ物のかれぬへらなりとは忘れねとも  
別ぬへしと云心也此哥は勝臣か娘に大江千里カ説テ遣ス哥也あかて

うその哥にそをたにとはそれをたにと云義也中略ノ詞也此哥は  
源正隆カ娘を恋て説テ送給兼明親王の御哥也 わすれなん

の哥は小野小町と業平と夫婦なりしか業平のひとかたなら  
ぬを恨ミテて小町心をと、めぬをみて業平のよめる哥也歌ニ有し

よりとは昔よりと云心也忘れなんの哥の心は君をわすれんする  
われをはし恨むな君にはあかれしとおもふと云り此哥は中納言

忠房カ娘ノ弁ノ命婦とて光孝天皇ニ思はれ奉て内裏に有け  
るを藤原関雄時々忍て通ヒけるに関雄たえニに成けるか

程なく行たりけるに命婦か説テ関雄にとらせける哥也  
たえず行の哥によとみなはとはと、こふる義也心有てや人の思はんとは

「 6ウ

「 6オ

かくゆかてと、こほれ心有て人のこぬと読り此哥は諸兄大臣、娘の許へしけく通ひけるか舒明天皇のおほしめすと聞てしは

しまいりさりければ女の方よりなとこぬと云遣したりける

返事に刑部卿大仲臣東人か読哥也東人と云は伊勢祭主也是

祭主の始也よと河の哥の心はしけくひかねは心のとかなり

思人は思らん下ニハはやき思にて有物をヲ読り是初草の女の許

へ読て遣し給惟貞親王御哥也そこひなきとは底無辺書

り日本記哥ニ云吉野河河波立ニ天夫妻山底際ニ陰之

宇津梨建留賀名又万葉云渡津海之底無辺水之塩

之瀬尔浮達留舟之憂身煩無そこひなきの哥心はふかく思

はむには色にも出さしされは藤のなみのた、ぬか如シあさく

思へはこそ色に出れと読り此哥は寛平四年七月九日大和

国長谷観音ニ百番の哥合して奉し時読ル哥也くれなるの

哥は文徳天皇を恋奉て染殿后未女御とも成給はざりし時に

み給哥也哥ニ無義みちのくの哥にしのふもちすりとニ云に

二義有一ニハ光孝天皇御時天智孫ニ中納言玉手ノ峯真ト云人陸

奥国守ニテ下たりけるにしのふの郡ニ文無宮ニみたれてうつくし

き石有此石にてすりをして王ニに奉るそれをしのふ摺と名付

是しのふすりの娘也是ははみたれたる事ニ云也ニハ日本記ニ云

難波ノ万男ト云人陸奥国ニ下りしのふの郡ニ住ける時同し処

に出羽ノ采女ト云て桓武天皇につかふまつりし人下りてすみ

けり万男男是を思かけて志をみせんとて木ヲ伐テ長サ三尺はかり

そこひなき

しのふもちすり

「 7 才

「 7 ウ



竹のもちすりと云事をして毎日一尺男門置ツこれは篠竹ニ  
きぬを巻く糸を以て文をゆひて藍する也其ツしのふすり  
と云也さてかくして互ニ千日志ヲみえてあひぬ此木ヲにしき木  
と名ツこの摺を忍ヒせし事なれはしのふすりと云されは  
みちのくのしのふもちすりとは読ル也みたれんと思われな  
くには忍ヒてこそあはむとおもひしかかく乱レあはんとは思は  
さりしをと読リならなくとはなしと云義也此哥は勝師

ならなくに

六葉

色ことなる

継大納言娘に忍ヒてあひ給ひける事世に聞えければ読ル給河  
原院左大臣融卿ノ哥也思フよりの哥に色ことなるとはことはた  
に色のなるわひて読也是は曼荼羅か淳和天皇ノ内裏につ  
かふまつりて時々もこさりけるに読テ遣ス真雅僧正ノ哥也  
ち、の色にと云は助内侍カ夫ヲあまた持たる事を恨みて読ル藤原  
敏方カ哥也哥の心は夫あまたしてわれにかわる色もえみ  
す心のもみちの様にかはるけしきもみえねはと読リ  
あまのすむの哥は業平の一方ならぬを恨みて読ル哥  
無義 くもりひの哥の心は君か目にこそみえねとも我  
心は君か影とそひたりと云りくもり日の影となる身と  
は身のやせをとろへたるを云也此哥は仁明天皇御時齋衡三年  
五月五日内裏哥合ニ読ル哥也下野毛雄宗ト云は于時木工允お  
やは是を注注色もなきの哥は人の心には色はみえねとも思ひそむ  
る心はうつろわんとは思はずと読リ昌泰三年二月十五日貫之  
か家哥合の哥也 めつらしきの哥に下ひもとくると云事如ニ上云  
しかもせぬとはしかもちきらぬと云心也此哥は内裏哥合ニよみ

しかもせぬ

「 8 才

「 8 ウ

かけらふ

堀江  
棚なし小舟

給天武天皇の御哥也かけらふと云に二義有<sup>一</sup>、春の日影の霞にさえられてちりめくを云也遊糸と云も是也二、かけらふを云虫有とむはうのことくして黒くやせたる也是を云されとも実義は日影を云也 春雨のふるひとなれはとは春雨のふる日を云也此哥は四条の後の春宮の御やす所にて御座けるを思ひかけ奉て読給昭宣公の御哥也春雨とは春宮なれは読給ほり江とは津国難波に有たな、し小舟とはきはめてちいさくて円木にて作りたる小舟也舟の大なるには棚とて板をはたに打つけたる也此たなしたる舟はきはめてはやき舟なれば早き事に読<sup>り</sup>此哥七条中宮いまた后とも成給はさ

「 9 才

伊勢出家  
して妙法尼

りし時に忍ひてあひ給ひけるか后と成給ひければあふ事かたかりけるに又御すかたほのかにみ奉て恋<sup>し</sup>かりければ読<sup>て</sup>奉る寧子公の御哥也 わたつみの哥は伊勢七条中宮に仕まつりしか中宮寛平八年十一月二日卒し給し後伊勢か思<sup>ひ</sup>深<sup>く</sup>して袖は海のことく<sup>ゴト</sup>に涙多かりけりさて伊勢出家して妙法尼といはれて桂の里に住ける所へ延喜二年三月二日延喜帝<sup>ヨリ</sup>歌よめとて題をたひたりけるに読<sup>て</sup>奉る哥也哥にわたつみとあれにしとことは中宮におくれ奉<sup>り</sup>涙に沈<sup>み</sup>たりしとこを又題を給りて歌をよまむとすれは昔<sup>シ</sup>思ひ出られて涙あはとうきぬへしと読<sup>り</sup> 古の哥但<sup>シ</sup>家の本には昔へと有此哥は延喜七宮忍ひまいるか絶て後大江、<sup>カ</sup>渚清娘通ひける時猶七宮申けれとも聞食さりける時読<sup>つ</sup>奉る哥也此哥にめて、あひ給ひけりといへり哥無義 思ひ

「 9 ウ

七葉

序

出ての哥は序<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>云人をしりてとは躬恒か娘也此家は西八条  
なり右<sup>ノ</sup>おほいまうちきみとは文徳天皇<sup>ノ</sup>第五<sup>ノ</sup>御子近院右大  
臣源<sup>ノ</sup>能有也昔<sup>シ</sup>をこせたりけるふみとは因香<sup>ノ</sup>朝臣<sup>ハ</sup>彼能  
有か妻也しか彼能有因香をすて、後橋<sup>ノ</sup>頼雄か娘をめとす  
此時彼因香能有か許よりをこせたりし文ともを取集  
て返すとて たのめこしの哥をは読なり哥にわかみふるれ

「 10 才

はとは我身いま<sup>ハ</sup>古<sup>キ</sup>ことに成てすてられたりと云心也此内侍  
は春宮<sup>ノ</sup>大夫良国<sup>ノ</sup>娘也忠仁公のめいなり返事の哥無義  
玉銚の路の哥に人をとうともわれかと思はむとはこと人  
をとうとも我かと思はんと読り此哥は宇多院の御子<sup>ニ</sup>政  
名親王<sup>ト</sup>申ける其娘<sup>メ</sup>清子<sup>ト</sup>申ける内裏に仕<sup>マ</sup>まつりける  
を常<sup>ニ</sup>申かよはし給しか延喜<sup>ノ</sup>御子惟忠親王<sup>ニ</sup>かよはせ給と聞  
けて読て奉り給貞信公<sup>ノ</sup>御哥也 まてといへはとはわか  
待と云は、ねてこそ行へきにと云心也小馬<sup>ノ</sup>足をれと云  
のたなばしとはとむれとも行に小馬の足をれと云  
心也 たな橋とは唯板にてわたしたる橋也此哥は当純  
大将のきたりけるを留<sup>リ</sup>けれともやかて帰<sup>リ</sup>ければ読て  
遣<sup>ス</sup>大江<sup>ノ</sup>玉渚か娘の哥也 中納言源昇<sup>ト</sup>は融<sup>ノ</sup>大臣<sup>ノ</sup>孫左  
京大夫致子<sup>ノ</sup>順か父也于時少将後には中納言<sup>ヨリ</sup>大納言<sup>ノ</sup>民部卿  
なれり近江介<sup>ニ</sup>延喜八年<sup>ノ</sup>事也 閑院<sup>ト</sup>は源<sup>ノ</sup>顕景大将<sup>ノ</sup>娘  
也哥に相坂のゆふ付鳥<sup>ノ</sup>事如序<sup>ノ</sup> 故郷の哥は業平  
有常か娘に思ひ付て伊勢か許へたえくにもこさりける時  
伊勢か読<sup>ル</sup>哥也 山かつの哥は左中将源<sup>ノ</sup>家成かきたりける

「 10 ウ

○

に通成ことつてせさりけるに読て遣ル寵メウか哥也

酒井人真トは于時左衛門尉但馬国ヨリ出来ル人也 大空の哥は

延喜四年九月一日ニ中納言兼輔卿の家ニ哥合しける時に読ル

也哥無義 あふまての哥は大宮右大臣源ノ有国常にかよひ

けるか絶てこさりける時彼大臣ノ装束の有けるを返す

とて読ル小町か哥也彼大臣は淳和天皇の御孫敦国ノ親王ニ男兄

信盛大納言ノ子とす信盛は敦国の一男哥無義 をやのま

もりける人の娘ト中納言兼輔の娘也是は大納言藤原

顕経をむこにとらんとて秘蔵しける娘ニ中将藤原の

興風か忍て通ひける也彼女忍ひて興風か許へきた

りけるを親のよふといひければ裳モを忘れて行たり

しを興風返スとてあふまての哥を讀り彼顕経は

昭宣公ノ七男後ニハ右大臣に成興風は濱成カ子也哥ニもく

つとは裳をそへて読ル也かたみこそその哥は業平か許より

形見にし給へとて双紙を奉ける時よみて返し給二

条の後の御哥也哥無義

古今和歌集卷第十五

○恋哥五

五条の后と云より月やあらぬと云に至まては伊勢物語に

如云花すゝきの哥は経行の娘の許へ読て遣す哥也哥ニほに

出てとはあらはれすと云心也 よそにのみの哥はわたるとなし

にとはわたる事なきにと云事也 みなれそめけむとは水ミヅな

れと云事をよそへて読ル也此哥は延喜三年四月十二日内裏の

哥合に読ル哥也我ことくの哥は同時の哥合也哥無義久方の哥

「 11 才

「 11 ウ

二葉

なきたる朝

めならふ人

逢にあひて

は中務を恋てよめる哥也 みても又の哥は大江の千里の  
娘ニ通ひし時いとふ気色の見えければよめる平の定文か哥也

哥無義 雲もなくの哥なきたるあさとはのとかなる朝ツ也  
いとほれてとは空のはれたるになぞらへて読ル也哥は延喜

御門夢のつけに依て一日ニ千首の哥合の有しに貫ル之ニ仰て  
貫之か家にてしける哥合によめる哥也 花がたみの哥に

めならふ人とは見なる、人のあまたあると云義也此哥は源ノ等  
娘ニかよひけるに又能有か娘又良相か娘此三人に通ヒ給ひけ

れは其事を恨みて能有娘、読て昭宣公に奉ル哥也うき  
めのみの哥は助内侍か心かはりしてあわさりけるか二年ヲを

へて後鞍馬より帰りけるか立寄たりける時読てとら  
せける躬恒か哥也無義 あひにあひてト哀あふてと

云義也家隆ニあふにあふてと云りさせる本説もなき也  
漢主伝云馬相如三代後臣身雖レ賢ト被レ嫉シ愚臣ニ籠リ蓬

室ニ哀ニ遇ニ涙ヲ不レ乾ス此意は相如岳岸ト云所に流テ蓬  
室ニ閉テ籠レたりし時の事也されはあひにあふとは哀ニあふ義也此

哥は宮内卿藤原兼年ニすさめられて後恨ミてよめる哥也秋な  
らての哥は左衛門佐兼持か娘ニ八条ノ弁ト内裏に仕マつりけるか家

ノ哥合しける時彼弁かよめる哥也是は元慶二年ノ秋也 ず  
まの浦の哥はおさをあらみとはおさあらしと云義也此哥は文屋

有季家ノ哥合ニ助内侍か読ル哥也 山城の哥は延喜二年三月十八日、  
内裏ノ哥合延喜御哥也哥ニ無義 あひみねはの哥はなに、ふかめて  
とは深ク思ヒげんと云義也此哥は寛平六年四月二日内裏哥合七条中宮

「 12 才

「 12 才

玉かつら

のよみ給哥也 晝のしきのはねかきの哥序如云 玉かつらの哥に玉かつらとは女のかつら也玉はほむる義也又は玉かつらとは女の異名也此哥は

深養父か娘清少納言兼輔忍ひてあひける時少納言兼輔をよしな

くや思けん後には有所をも知せざりける時兼輔、読ル哥也清少納言

付前後二人有前、少納言深養父娘是は延喜御時也後少納言右

馬助忠光か娘也是は一条院、御時の人也我袖にの哥にまたきしく

またきしくれ

山の井

れと云は袖の涙を云也人の心にあきやきぬらんとは人のあきぬらんと云義也此哥は黒主か娘を恨みて読り躬恒か哥也 山の井の哥に

やまの井のあさき心と云事はあさか山の哥を本哥にして読ル也山の井は木葉散入て深きもあさくなるされはあさき事に読ル也

此哥は寛平七年二月五日延喜末、春宮、御時哥合せさせ給ひし時

忘草

よませ給哥也、忘草の哥に忘草と云五、義有一、はかへに生ふる草をわすれ草と云是は壁、草生、程に成ぬれは其家作

りたりし人の事も忘れておほえずと云義也六帖集云

昔たか住なれにけん宿なれはかへに忘る、草しけるらんと云り

二、人の墓、生たる草を云是は墓、草の茂る程に成ぬれは其死

人の事もわする、と云義也俊頼、集云たらちねの親の形見も

忘草生れとぬる、袖のかな三、茗荷を云是は仏在世、須梨盤、特

我名を忘る、程、人墓より生たりし草なれは忘草と云四、萱草

を云文選云 梁興、か思、未、忘、暫、語、久、修、練、行、聖、得、萱、草、忘

レ憂、文 文集云萱草之種、ハ、不、住、レ、人、之、意、君、恨、中、桂、木、与、人、意

為、長、方、見、文 此、文、意、ハ、梁、武帝の太子に梁太子興太子とて二

人有武帝崩御の後此歎、不忘其近きあたりに貴、聖の有ける所

13オ

13ウ

三葉  
唐土

○

に行て此事を歎給聖云萱草は人の歎をやむる為也是を常服すへしとて萱草をとらす約束たかはすされは忘草と云

「 14 才

わすれ草本文付の実義は是也住吉岸忘草口伝云大明神初住吉跡垂給し時住吉濱はすみにくしとて眷族みなかへらんとしければ大明神かへさしとて神通を以て槍を誘生給故道を忘れて眷族の神達帰り給事を不得依之うつ木を忘草と云是は

住吉津守氏家秘蔵義也桂木を方見云事は大国に有人死て後其墓よりかつらの木の生たりけるを子常に是をみて親形見と思て歎ける事也今此忘草の哥は藤原永年大臣娘平城天皇の後にまいたりしか久里御座ける時平城あそはして遣はさる哥也恋れともの哥は清和御時貞観八年四月一日内裏哥合一条后読給御哥也無義夢たにの哥は衣通

姫允恭天皇御后なりしか土師海雄娘を思食て時々おはしましける時王を恨奉て衣通姫読給哥也土師海雄土師宇庭子也此哥によりて御門と召なをして衣通姫より外に又思召方無りけり唐の哥の心を長能私記云唐雖隔蒼波万里夢道猶不越一夜君雖为一宅隔壁契遠千里文書此歌延喜四年七月内裏千首哥合有ける時読哥也貞登は仁明天皇二男始貞姓賜于時備中守也ひとりのみ哥心はひとりなかめふる家のつまなれは人しのふ草も生けりと云是をわかつまを家のつまになぞらへて忍草を人をしのふになぞらふる也

「 14 ウ

此哥は平篤行家哥合に読也我やとの哥はかさきの定空僧都か弟子万寿云児の有しを約束してたひく行けれとも

こめやとは

いましは

こさりければ読<sup>ル</sup>也彼児<sup>ハ</sup>昭宣公<sup>ノ</sup>孫<sup>ヲ</sup>顯<sup>アキツ</sup>經<sup>ツネ</sup>大納言子也哥哥<sup>ト</sup>  
いまこむとの哥に思ひくらしとは日くらしをかくして読<sup>ル</sup>也此哥は橘の長

盛か家の哥合<sup>ニ</sup>読<sup>ル</sup>也こめやとはの哥は惟高親王時々かよひて御座け  
るか絶てましまささりければ読<sup>テ</sup>奉る景式の大君<sup>ノ</sup>娘<sup>ノ</sup>哥也こめ

やとはこしと云義也いましはしとの哥の心はいましはとは今はと

云心也わひにしとは今は帰らしとはれし物をと云心也さ、かにの衣にか、  
るとはさ、かにのくものふるまひをするまでにこぬはと云義也

さ、かにのくものふるまひ序如云此哥は橘忠幹<sup>カ</sup>家の哥合<sup>ニ</sup>貞元親王

よみ給る哥也月夜にの哥にあめもふらなんわひつ、もねんと云事は

伯撰<sup>ニ</sup>云妻<sup>シユ</sup>姦<sup>シユ</sup>殿<sup>ノ</sup>深<sup>シ</sup>雨<sup>シ</sup>夜<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>問<sup>ナ</sup>念<sup>ハ</sup>独<sup>リ</sup>寝<sup>ル</sup>秋<sup>ケ</sup>夜<sup>ケ</sup>長<sup>ケ</sup>不<sup>レ</sup>給<sup>進</sup>別

門<sup>ノ</sup>暁<sup>ノ</sup>空<sup>ヲ</sup>月<sup>ヲ</sup>清<sup>ケ</sup>君<sup>ヲ</sup>待<sup>ツ</sup>君<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>来<sup>哉</sup>是<sup>ハ</sup>會<sup>命</sup>王<sup>ノ</sup>たのみ給ひ

ける夜<sup>ノ</sup>雨<sup>ノ</sup>降<sup>レ</sup>ければこじと思召て歎給ひけるに暁<sup>ニ</sup>成て

空の晴たりける時悦<sup>ヒ</sup>給事<sup>ヲ</sup>書<sup>リ</sup>妻<sup>シユ</sup>姦<sup>シユ</sup>殿<sup>ト</sup>空<sup>上</sup>宮<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>大<sup>極</sup>殿<sup>也</sup>

分別門は此殿門也是は高簾の事也此意をよめる哥也此哥は三条

右大臣源<sup>ツネシ</sup>常<sup>シ</sup>娘<sup>ノ</sup>時々通ひ給ひけるか絶て後<sup>チ</sup>月面白かり

ける夜待なれし心地して恋しかりければ読給白河左大臣

長年の哥也忠仁公一男也うへていにしあきたかるまで

の哥は菅野高世但馬守<sup>ニ</sup>右国遣し時藤原良方<sup>ノ</sup>娘をくし

て下りけるか四月<sup>ノ</sup>比京へ登<sup>リ</sup>て其秋迄こさりければ京

へ読<sup>テ</sup>遣しける哥也こぬ人の哥は曼荼羅かたのめてこ

さりけるに定海法眼の哥也歌無義ひさしくもの哥は

貞観十年秋忠仁公住吉<sup>ニ</sup>久<sup>ク</sup>寵<sup>リ</sup>給ひたりける時彼北方

の住吉へ読<sup>テ</sup>送り給哥也彼北方は名虎卿娘也哥無義住の

「 16 才

「 15 才



四葉

三輪の  
しるしの杉

えの哥にあし□つゝの音に鳴ぬ日はなしと云は鶴を恋する鳥と云事は  
上、大和武尊の本文也此哥は延喜第三姫宮従子内親王を恋奉て読  
給兼覽の大君、哥也業平朝臣あひ知りてと業平、伊勢

夫婦なりし時、事也かれ方ニ成けるとはわかれ方に成を云

父か大和守ニ侍りけるとは伊勢、父藤原統蔭ツツキカケ大和守にて

有し時也哥の心は大和、三輪、山の栢、しるしは有ともよし尋しと

読り三輪、杉、しるし上ニ如云いせ業平か後ニ、業平か兄仲平カメト妻ト

成といへり 吹まよふ野風をの哥は小野、貞樹か娘、常ニまひりけ

るか絶てまいらさりける時読て遣ス、雲林院、御この御哥也哥無義

いまはとての哥は小町年衰て後問、人もなかりければいての里ニ

閉籠テ有し時小野貞樹カ許へ読テ遣ス哥無義 人を思ふ哥に

まにくとま、にと云心也 業平ト云詞よりゆき帰りの

哥迄ハ伊勢物語のことし から衣の哥は大伴懐人チカか娘を恋

て読給哥也此哥ノ意はきみとなれば身にまつわれ近付ツへき

に余所ニ成てかけて問る、事よと読ル哥也 秋風はの哥

に人の心空に成と云は人の心のよそになるを云也此哥は延

喜、七宮ニ忍てまいりけるか貫之か常にまいりて後ハあひ

給はさりける時友則か読て奉る哥也哥無義 つれもな

くの哥ノ心はこと方に心うつるひて我につれなき人は秋よりさ

きの紅葉成と読り此哥は昌泰二年賀茂社の哥合。によめる哥也

こ、ちそこコなへるとは彼只後陽成ウヘ、上童、成しか風をや

みて閉籠たりしに清原、春元か常ニかよひけるか久音信

なくして夢のよく成かたに問たりければ読ル也 兵衛、高経、

まにくと

心の空になる

五葉

16ウ

17オ

右大弁ノ娘也哥無義 あひしれりける人トハ平の好風也是は  
 小町か姉備前か許へ常に通ひけるにこと人に思付てかれ  
 〳〵に成ける時に備前か許へ読て遣ス哥也哥ニかれ行  
 をのとはをのか身をよそへたる也 思ひそたえすもえける  
 とは思ひを火になぞへたる也 思ひけるとは七条ノ中宮別  
 奉て歎ける時事也 ものへまかるとは春日へ参ける時也哥ノ  
 心ハせめて冬かれの野のことくならは春を待事もあらまし  
 年おひぬれ身そかなしさと読り水のあわの哥は賀茂  
 の社ノ哥合ニ読り哥に消てうきみとははかなさうき身と  
 云事也此哥は昌泰二年十二月哥合也 みなせ河の哥に家ノ本  
 こと書有上男共トハ小野将親侍從頭忠右馬頭家平兵衛  
 督敏方左衛門督敏行也藏人ともとは伴ノ光清源ノ行尚中  
 原兼定等也 みなせ河の哥は寛平二年三月三日哥也  
 吉野河の哥にはやくいひてし事トハすみやかにいひてし  
 事ト云事也信濃守にて有し時彼国成ける女なれて  
 後京へのほりたりければ京へいかに問ぬそといひやりたりけ  
 れは返しに読て遣ス哥也 世の中の哥に花そめとはつき草の  
 花にそめたる衣也是は貫之か常に参けるかかき絶て  
 参らさりける時読テ遣ス七ノ宮ノ御哥也 次哥同し哥無義  
 色みえての哥序如云 われのみを哥は西三条の左大臣良相  
 か娘の許へ陽成院の読て遣し給御哥也 思とももの哥は延  
 喜二年七月七日内裏の哥合に読ル哥也無義 今はとての哥は  
 醍醐実尊律師か弟子の兎能の五節ノ見物に出たり

しを恋しかりて近付て後かの児かれゝに成ければ読ル

宇多、第七、御子真空親王の御哥也彼児の名をは不

注親は中納言藤原、是家か子也哥無義、わすれ草の哥

に人の心に霜やをかなんとは我をわすれんとする草

なればその草をからしして忘れさせしと読る也此哥は

三谷、基平か娘、許へ読て遣スなり、寛平の御時屏

風の哥無義、あきの田の哥にいねてふとはいねと云義也

かけなくに ○

かけなくにはいはぬにと云心也人のかるらんとは別るらんと

云事也此哥は大伴行藏か娘に忍ひてあひける時女かれゝに

なる時に読り彼女は天下第一の美女なり、はつ雁の哥に人

あきしうければと人の心にあかる、と云心也延喜二年

七葉 七月七日内裏の哥合、哥也、哀ともの哥にいとなかるらんとは

いとなかるらん 取 寂なかる、と云義也同時哥合に延喜御門、御哥也、あまのかる

われからと 云虫 の哥にもにすむ虫のわれからと云は藻、中ニわれから

と云虫をすこしもあらくすれば死する也あたなる事ニ読也

此哥業平か事に依て二条后昭宣公、許へおし寵られ給ひ

ける時読也或本ニハ典侍直子ナリシナライコト見タリ源基世ハ、因幡、源基世、

大君の娘也、あひみぬもの哥の意はあひみぬもゆくもわか

身からにてあるに思ひもしらぬ君にとくるといへり此哥延

喜三年八月□八幡、哥合ニ読ル哥也、寛平御時哥合とは寛平

二年十月一日の□合也哥無義、人しれすの哥心は忍ひたる事な

らは世にあらはる、をも世になき名ト云てまし此哥は高藤大臣ノ家ニ

「 19 オ

「 18 ヲ

きかくに

人のきかくにとはそれをたにわれを思とて我宿をみ  
たると云そ人のきたにと云心也此哥は神龜二年三月十一日聖

武天皇の御哥也 逢事の哥は源忠家ホトコスカ、哥合ニ忠カ読ル哥也

哥無義 侘はつるの哥は高藤、大臣の娘を恋て読給重

明親王、御哥也哥無義恨てもなきてもの哥にか、みに見

ゆる影ならずしては日本記云天武天皇の后にわかれ奉

て彼御形見に鏡を常に御覽しければ次第におとろへ

御座スかたの鏡に見えける事を歎かせ給ひけるおほ

く哥にも歎に形を鏡にみゆると読り此哥は大江、清定

か娘を恋て読ル也 夕されはの哥は延喜二年七月七日哥

合朱雀院御哥無義 わたつみの哥染殿後の

御皇子のみ御座て内裏へもましますさゝりける時に文

徳天皇のあそはせる御哥也わかみこす涙とは我

涙也是ヲ末松山の波こゆる義によせて恨ミ読ル也哥

無義 或本ニハ坂上是則か哥ト見テリ

うきなからの哥になかれてとたに頼まれなくにとは

なからへてと云義也此哥は朱雀院春宮、御時延喜三

年七月十三日哥合哥也無義 なかれてハの哥に

いもせの山とは大和物語の注ニ云欽明御代に候臣下夫

婦互に思合て暫もはなれさりけるをめのみよき由

を帝ニ聞召て召れければ都を逃て吉野山の中に

かくれて居たりそこにてやかて二人なからむ

なしく成ければ其山をいもせ山と云此哥の意ハな

脱カ  
山岸云

八葉

19ウ

20オ

からへていもせの契もたのみむ事かたしと読心也  
此哥は敏行朝臣業平かいもうとを恨

（6行分空白）

て読也家本ニ此外哥三首有 哥はたかためと云は忠峯か  
舅榮仙法橋か大峯へ入ける時弟子にて侍りける童のよめ  
る哥也 きよたきのと云哥は嵯峨天皇御時内裏哥合  
の哥也 なにわかつたの哥は三条町を恋てよめる哥也

古今和歌集聞書恋部終

（4行分空白）

古今和歌集卷第十六

○哀傷哥

わたり川  
みつせかは

臣下を君と  
いふ事

いもうとのみまかりけるとは小野篁かいもうと備前守中

原俊遠か妻昌泰三年四月八日死ス哥にわたりかはとは三途

河也又はみつせかはとも云 さきのおほいまうちきみとは忠仁

公也貞観十七年九月二日薨給ふ白川の花蓮に葬奉る延

喜四年三月贈正一位哥は白川と云は白川関白の御子なれば云

哥の意は人々思ひせつにして血の涙を流す故に白川と

云名は君か世までこそあれ其後白川と云名もあらしと云

毛詩云陵帝亡孫恋跡流血涙是は黄帝御子陵黄

帝有是は鯨異名也此帝死後末おとろへたりければ皆氏

成レリ亡孫陵弥云者昔恋陵黄帝墓行悲ければ

墓中血流レ出墓を掘てみれば陵黄骸両眼より出

たり是をみて鯨も血涙を流て悲是を聞召て舜の

代に召て臣下とせらる弥相公是也此本文の意を読也陵

「 20ウ

「 21ウ

「 21ウ

花も色を  
さけと云事

二葉

くひのや  
ち度

三葉

弥<sup>ハ</sup>陵<sup>ノ</sup>黄<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>也 堀<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>おほいもうちきみとは昭<sup>ノ</sup>宣<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>也

仁<sup>ノ</sup>和<sup>ノ</sup>元<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>に始<sup>テ</sup>て病<sup>ヲ</sup>を付<sup>テ</sup>て寛<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>正<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>。四<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>。薨<sup>ス</sup>

于<sup>テ</sup>時<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>也深<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>里<sup>ノ</sup>。東<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>。有<sup>ル</sup>僧<sup>ノ</sup>都<sup>ノ</sup>勝<sup>ノ</sup>延<sup>ノ</sup>は貫<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>か末<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>昭<sup>ノ</sup>宣<sup>ノ</sup>

公<sup>ノ</sup>の御<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>童<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>仕<sup>マ</sup>つりし也哥<sup>ノ</sup>に空<sup>ノ</sup>蟬<sup>ノ</sup>。義<sup>ノ</sup>如<sup>レ</sup>上<sup>ノ</sup>。上<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>。峯<sup>ノ</sup>

雄<sup>ノ</sup>。は宗<sup>ノ</sup>岡<sup>ノ</sup>。大<sup>ノ</sup>頼<sup>ノ</sup>か二<sup>ノ</sup>男<sup>ノ</sup>延<sup>ノ</sup>喜<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>依<sup>ノ</sup>宣<sup>ノ</sup>旨<sup>ノ</sup>。改<sup>レ</sup>姓<sup>シ</sup>。上<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>。号<sup>ス</sup>。是<sup>ハ</sup>上<sup>ノ</sup>

野<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>。内<sup>ノ</sup>裏<sup>ノ</sup>。北<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>の守<sup>ノ</sup>護<sup>ヲ</sup>をす<sup>ル</sup>職<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>也上<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の絶<sup>レ</sup>たりけ

れは上<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>を給<sup>ル</sup>于<sup>テ</sup>時<sup>ノ</sup>民<sup>ノ</sup>部<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>輔<sup>ノ</sup>深<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>の野<sup>ノ</sup>辺<sup>ノ</sup>の哥<sup>ノ</sup>も昭<sup>ノ</sup>宣<sup>ノ</sup>

公<sup>ノ</sup>。薨<sup>シ</sup>給<sup>ヒ</sup>し時<sup>ノ</sup>の哥<sup>ノ</sup>也今<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>はかりは墨<sup>ノ</sup>染<sup>ニ</sup>にさ<sup>ケ</sup>とは昭<sup>ノ</sup>

宣<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>。薨<sup>シ</sup>給<sup>ヒ</sup>し時<sup>ノ</sup>の哥<sup>ノ</sup>也。奉<sup>ル</sup>花<sup>ノ</sup>も色<sup>ヲ</sup>を着<sup>キ</sup>。読<sup>ル</sup>也

藤<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>。敏<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>かみまかりけるとは元<sup>ノ</sup>慶<sup>ノ</sup>八<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>廿<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>于<sup>テ</sup>時<sup>ノ</sup>中

将<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>也其<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>。は七<sup>ノ</sup>条<sup>ノ</sup>。有<sup>ル</sup>ねてもみゆの哥<sup>ノ</sup>に万<sup>ノ</sup>の義<sup>ノ</sup>なし

あひしる人<sup>ノ</sup>のみまかりけるとは紀<sup>ノ</sup>齊<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>于<sup>テ</sup>時<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>章<sup>ノ</sup>博<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>延<sup>ノ</sup>喜<sup>ノ</sup>

三<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>。死<sup>ス</sup>。十七<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>也是<sup>ハ</sup>貫<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>か一<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>也哥<sup>ノ</sup>無<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup> あひ

しれる人<sup>ノ</sup>とは紀<sup>ノ</sup>有<sup>ノ</sup>友<sup>ノ</sup>延<sup>ノ</sup>喜<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>正<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>卒<sup>ス</sup>。是<sup>ハ</sup>友<sup>ノ</sup>則<sup>ノ</sup>か

父<sup>ノ</sup>也哥<sup>ノ</sup>無<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup> あねのみまかりけるとは読<sup>ル</sup>トハ忠<sup>ノ</sup>峯<sup>ノ</sup>か娘<sup>ノ</sup>也

哥<sup>ノ</sup>無<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup> 藤<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>。忠<sup>ノ</sup>房<sup>ノ</sup>あひしる人<sup>ノ</sup>とは源<sup>ノ</sup>養<sup>ノ</sup>父<sup>ノ</sup>か娘<sup>ノ</sup>也寛<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>九<sup>ノ</sup>年

四<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>。薨<sup>ス</sup>。彼女<sup>ノ</sup>は忠<sup>ノ</sup>房<sup>ノ</sup>か通<sup>ヒ</sup>ける妻<sup>ノ</sup>也 さきた、ぬの哥<sup>ノ</sup>は悔

やち度<sup>ノ</sup>かなしきは流<sup>ル</sup>、水<sup>ノ</sup>の帰<sup>ラ</sup>ぬ如<sup>ク</sup>と云<sup>リ</sup>紀<sup>ノ</sup>友<sup>ノ</sup>則<sup>ノ</sup>かみまか

りけるとは序<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>云<sup>ハ</sup>あすしらぬの哥<sup>ノ</sup>無<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup> 時<sup>ノ</sup>もあれの哥<sup>ノ</sup>

忠<sup>ノ</sup>峯<sup>ノ</sup>か弟<sup>ノ</sup>壬<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>、忠<sup>ノ</sup>重<sup>ノ</sup>に時<sup>ノ</sup>兵<sup>ノ</sup>衛<sup>ノ</sup>府<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>なりし朱<sup>ノ</sup>雀<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>。秘<sup>ノ</sup>藏<sup>ノ</sup>

の随<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>也是<sup>ハ</sup>か延<sup>ノ</sup>喜<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>。秋<sup>ノ</sup>死<sup>タ</sup>りし時<sup>ノ</sup>に読<sup>ク</sup>也哥<sup>ノ</sup>に秋<sup>ノ</sup>やは

人<sup>ノ</sup>を忘<sup>ル</sup>るへきとは秋<sup>ノ</sup>は物<sup>ノ</sup>思<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>と云<sup>フ</sup>本文<sup>ノ</sup>の意<sup>ヲ</sup>を讀<sup>ミ</sup>り如上<sup>ノ</sup>

母<sup>ノ</sup>か思<sup>ヒ</sup>にてとは躬<sup>ノ</sup>恒<sup>ノ</sup>か母<sup>ノ</sup>。死<sup>タ</sup>りける也哥<sup>ノ</sup>無<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup> 父<sup>ノ</sup>か思<sup>ヒ</sup>にて

「 22 才

「 22 ウ

山寺

とは忠峯<sup>カ</sup>父河内<sup>セウ</sup>拯忠<sup>セウ</sup>衡也藤衣<sup>フジイ</sup>哥無義 思ひに侍とは  
貫<sup>ツル</sup>之か妻死たりける時近江の石山へ参ける時<sup>ト</sup>事也彼妻は  
文屋康秀か二男文屋清重か娘也<sup>清重異本</sup> 哥無義 思に

山寺

○

侍る人とは友則<sup>カ</sup>二男<sup>ニ</sup>死て其子木工<sup>ニ</sup>允紀有秀か許へ行也  
無義 女のおやの思ひにとは近院右大将当純元慶八年九月  
十一日<sup>ニ</sup>薨<sup>ス</sup>ス彼娘<sup>ハ</sup>九条内侍とて陽成院に仕へる人也集<sup>ニ</sup>近院<sup>ノ</sup>  
内侍と入<sup>レ</sup>此人此歎<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>津国金龍寺籠<sup>リ</sup>ける所へ七条<sup>ノ</sup>中宮<sup>ノ</sup>  
ノ訪<sup>ニ</sup>遣<sup>テ</sup>給御返事<sup>ニ</sup>読<sup>リ</sup>哥は内侍か也哥無義 諒闇とは國王<sup>ノ</sup>  
御忌也是は陽成院仁和元年二月十一日崩御御年卅一池の  
のほとりとは法勝寺の池のほとり也其比は法勝寺はなし忠仁<sup>ト</sup>  
公<sup>ノ</sup>御所也水のおもにしつくとは枝付<sup>ト</sup>書<sup>リ</sup>万葉云藤及之底<sup>ツコ</sup>  
奈留水之影清見枝付色於毛玉登古曾見礼<sup>ト</sup>云<sup>リ</sup>され

しつく

みたる花の水の底迄も色の有様に君はかなくして坐<sup>マシ</sup>ま  
すとも御恵<sup>ハ</sup>勝<sup>リ</sup>トよめり 深草の御門御国忌読<sup>ル</sup>とは  
仁明天皇天安二年三月十五日<sup>ニ</sup>崩御也 草深きの哥の事序<sup>ニ</sup>  
如云仁明天皇御周忌<sup>ノ</sup>仏事<sup>ノ</sup>導師<sup>ハ</sup>道増僧都也是は長衡の  
大臣<sup>ノ</sup>子也彼仏事の所は横川<sup>ノ</sup>観音寺也哥<sup>ニ</sup>如云 河原院<sup>ノ</sup>  
大臣みまかるとは寛平六年八月廿五日七十三<sup>ニ</sup>薨<sup>ス</sup>ス彼家<sup>ハ</sup>河原  
院也近院右大臣とは能有<sup>ノ</sup>事也哥<sup>ニ</sup>うちつけとは早速と書<sup>リ</sup>  
古撰<sup>ニ</sup>云早速丹花之色古曾増梨建礼<sup>ニ</sup>千々之霞<sup>ニ</sup>邪染<sup>ニ</sup>  
盡<sup>ス</sup>濫<sup>ス</sup>今のうちつけの哥<sup>ニ</sup>無義藤原の高経みまかるとは昌泰  
元年四月八日也哥は次<sup>ノ</sup>年四月に郭公の鳴ければ読<sup>ル</sup>也哥無義

横川観音寺

打つけに

「 23  
ウ

「 23  
オ

桜をうへてみまかると云人は融の大臣河原院に植たる也哥

無義 ありしみまかるとは紀助範中納言貞観十八年七

昔のこさに 月に卒<sup>ス</sup>色も香もの哥に昔のこさと花の色のこさ

河原院<sup>ノ</sup> 塩竈 也 しほかまと云所のさまを作るとは彼河原院には六十六ヶ国、

名所を作りたりしに塩竈浦を作たるを説<sup>ル</sup>也哥無義

藤原の利基<sup>ト</sup>、良門、一男此時は右近中将也後<sup>ニハ</sup>二位、大納言也曹司<sup>サウシ</sup>

は内裏<sup>ニ</sup>貢御<sup>ノ</sup>取次申す人也栖大極殿<sup>ニ</sup>有今利基<sup>カ</sup>通<sup>フ</sup>曹司<sup>ト</sup>は

高階<sup>タカノキ</sup>為章娘也貞観八年十二月一日<sup>ニ</sup>死<sup>ス</sup>彼家<sup>カ</sup>有<sup>ハ</sup>し<sup>ス</sup>き也

其家<sup>ハ</sup>八条<sup>ニ</sup>有哥無義惟高<sup>ノ</sup>尊父の侍りけむ時説<sup>ル</sup>哥<sup>ハ</sup>こひ給<sup>ス</sup>

とは友則か父有友か説たる哥也あるとこはせ給也其時哥を

奉るとて我哥を書添て奉哥<sup>ニ</sup> ことならはとは如此ならはと

ことならは 涙の瀧 云義也哥の心は如此ならは説置ことのはも消もせて涙の瀧を

ます事はと説り涙の瀧と云事万葉云 身於沈牟<sup>ミラシム</sup>涙之瀧<sup>ナミダノタケ</sup>

尔伊賀<sup>ニイカ</sup>天吾<sup>テワ</sup>憂<sup>ウ</sup>名流<sup>ナハル</sup>留事<sup>ル</sup>登成良新<sup>トコトナラシ</sup>説<sup>リ</sup>此哥は家

文記録作者 持か妻かれ<sup>レ</sup>に成ける時恨て説<sup>ル</sup>哥也又新撰文記録<sup>ニ</sup>云唐<sup>ノ</sup>

太宗賢皇帝雖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>叶政道<sup>ノ</sup>其涙如<sup>ニ</sup>源洌<sup>ノ</sup>和<sup>ノ</sup>醍醐聖主帝<sup>ハ</sup>悲<sup>ム</sup>

士民之貧<sup>ニ</sup>其淚似<sup>ニ</sup>清瀧<sup>ノ</sup>されは涙を瀧<sup>ト</sup>云事文<sup>ニ</sup>云<sup>リ</sup>此録は

六葉 江<sup>ノ</sup>中納言朝綱作也 なき人の哥<sup>ノ</sup>意は郭公はよみちへ行鳥な

れは歎と告<sup>テ</sup>遣<sup>ラ</sup>説<sup>リ</sup>此哥は昭宣公薨<sup>シ</sup>給ひて後其夏郭公

の鳴ければ説給七条<sup>ノ</sup>中宮哥也七条<sup>ノ</sup>中宮<sup>ノ</sup>昭宣公御娘也 たれ

見よとの哥に花さけ<sup>ル</sup>なんとは大納言源<sup>ノ</sup>昇<sup>ノ</sup>元慶六年九月卅日<sup>ニ</sup>

薨<sup>テ</sup>其年のしはすに彼娘を召て内裏の上童<sup>ノ</sup>せられける

時頻<sup>ニ</sup>召て装束なと送り給ひければすまひけれとも

□司ノ女

「 24 才

「 24 才



白雲の  
たつ野

霞をあはれ  
と見よ

かなはて参ルとて読テ奉る哥也たれみよとてかゝる榮花は  
な咲ける覽と読リしら雲のたつ野とはやく成にし物をとは  
白雲の立かゝる野と成し宿はと云事也長能記ニ文選ノ漢皇ノ賦  
心を引て書リ白雲ハ昔ノ紅燕昭カ之陵紅葉ハ今ノ詠シテ在林カ之家ト  
書リ文ノ意は燕太子ノ死給ひたりしに九里松野原ニ葬シ奉リ  
庭に覆へり其しるしにして仕へし人々常にみて歎けるを云也白雲の  
たりしかは白雲の。たつ野と読ル其心也在林。在中将也在京ノ  
在下羽村ノ林トヲ取て在林ト云也是は在中将東五条ノ家に鶏冠  
木ヲかりに植たりけるか近キ世まで不枯して有ければ家ハ  
替り主はかはれとも其紅葉昔に不替事を人も多ク哥に読リ  
其を引て長能も書ル也此木近キ世に焼失ニやけてなしたれ  
みよとの哥を讀て奉りたりければ彼娘いとま給て尼に  
成て法輪ニ寵レリ法輪の尼ト云ルハ是也。式部卿の御子トハ延  
喜第九ノ御子一品式部卿敦慶ノ親王也閑院の五ノ御子トハ宇多院  
第五ノ姫宮桂の内親王也彼式部卿の親王ト夫婦ニ成給て幾  
程無く彼内親王薨し給ひければ。御歎キ深クして出家し給  
ひて葛城山に閉籠給へり中カ一年有て京へ出給たりける次  
彼内親王ノ住馴給ひし御所をみ給へは庭も荒はて、昔にも  
似す内ニ入て朝夕御座シ所にて泣キ悲ミ給ふ程に古キ帳ノ有ル帷ニテ  
緒ニ物を結タリ解てみれば彼内親王の御手にて哥有病ノ御時あ  
そはせるとみえて御手も四度斗無キ有けり哥に山の霞を  
あはれとはみよとは六帖ニ雲となり霞となりならん時までも跡の  
かたみを思ひ忘るなど平城天皇の崩御遠ク成て后ニ読テ奉

「 25ウ

「 25オ

玉よりも

ける哥ノ心を以テ読給ひける也内親王ハ延喜三年七月一日薨  
給云里ノ人の国へ行けるとは紀有常か甲斐守にて有シ時  
滋春か父成ければ行て暫住ける跡に常に通ひける妻京にて  
病て死なんとしける時滋春見よとて哥を讀てをく今このうゑ  
をたにの哥也滋春も甲斐国にて死ければ彼哥をみるニ不及さて  
彼国へくして下りたりける妻は独り京へ帰り上げる道にてつれ  
てこしの哥を讀也旅ノ段に有此京にて死ぬる妻は清原元輔か  
婦也哥に玉よりもとは我魂よりもといへる也病にわつらふとは  
千里昌泰二年播磨守に成て下レリ其年の九月に病付てよ  
はく成ける時京なる妻の許に遣ケル其を人のもとに遣スと云也  
其月の十三日に卒ス哥無義 身まかりなんと藤原惟岡父  
国經大納言の使に大和国へ下りける時彼国にて病付て京ニ  
歸りて幾程もなく死ける時讀て父に取せける時彼後生年  
廿一也哥無義 病付てよはく成トハ業平元慶四年五月廿八日  
病付て死なんとしける時読ル哥也哥無義 甲斐国ニあひ  
しる人とは有常也女にみせよと京にて死たる妻の許へ死に  
たりともしらていひ遣ル也哥無義 今はかきりのかとてな  
りけり

「 26  
才

「 26  
ウ

「 後見返し

「 後表紙

七葉